View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Konan University Repository

KONAN UNIVERSITY

事象キャンセル可能性についての質問紙調査 : その詳細データ

著者	青木 奈津乃, 中谷 健太郎
雑誌名	甲南大學紀要.文学編
巻	163
ページ	41-57
発行年	2013-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00001079

事象キャンセル可能性についての質問紙調査

――その詳細データ――

青　木　奈律乃
中　谷　健太郎

1．完結性と事象キャンセル可能性

動詞の語彙的アスペクトの研究は Vendler（1957）以降，盛んに行われており，特に完結性（telicity）に関しては多くの研究がなされている。完結性とは語彙的アスペクトの一種で，言語的に指定されたゴールに向かって進行する事象の特性として定義づけられる。例えば，「窓を開ける」は，「窓が開いた状態になる」というゴールに対して窓開けの行動が行われる事象であるため，完結性を持つと捉えられる。それに対して「歩く」という事象はそういったゴールが語彙化されていないため，未完結性事象である。英語では完結性事象が表明（assert）されていれば，その事象を後で否定することはできない。

(1) #I opened the window, but it didn't open because it was rusty.
(2) #I moved the desk, but it didn't move because it was too heavy.

(1)の前半で，窓を開けたことが表明されているが，後半ではそれが否定されている。完結性事象の失敗の原因が because 節で表されていても(1)は容認することができず，(2)も同様である。

しかし先行研究では，日本語の完結性事象はキャンセルされることができることが指摘されている(Ikegami 1985, 影山 1996, 宮島 1985, Tsujimura 2003)。

(3) 窓を開けたけどさびついていて開かなかった
(4) 机を動かしたが重すぎて動かなかった。

Tsujimura（2003）はこれらの例に基づき，日本語における完結性は語彙的に含意（entail）されておらず，完結性解釈は会話の含意（implicature）から派生するものであると主張する。会話の含意によって引き起こされる完結性はキャンセルすることができるため，日本語の事象キャンセルは矛盾を生むことなく可能であると論じている。

2．Aoki and Nakatani（forthcoming）の仮説

この主張に対し，Aoki and Nakatani（forthcoming）（以降 A＆N）において我々は Tsujimura（2003）の主張が妥当であるかを質問紙調査によって検証した。A＆N の調査においては，Tsujimura がキャンセル可能だと主張した例を，完結性が欠けている例（疑似完結述語）と完結性が明確に存在する例（到達述語）と比較し，その容認度がこれら両極と比較してどこに位置づけられるかが検証された。

疑似完結（fake telic）の述語とは以下の例文に含まれるようなものである。

(5) 彼は手を洗った。
(6) 彼はキャッチャーにボールを投げた。

(5)「洗った」と(6)「投げた」はどちらの述語も活動プロセスと結果状態を含んでいるように見える。すなわち，「手を洗った」には「手を洗う」という活動と「手が綺麗になる」という結果状態が，「キャッチャーにボールを投げた」には「ボールを投げる」活動と，「キャッチャーがボールを受ける」という結果状態が一見含まれているようだ。通常の文脈ではそういった結果状態が起こりうると考えられるが，それらの結果状態が必ずしも実現するとは限らない。例えば，「手を洗った」としても手の汚れが落ちないことはありうるし，「キャッチャーにボールを投げた」としてもボールが届かないこともありうる。実際，そういった結果状態は英語では自然にキャンセルできる（Bouillon and Bussa 2001）[1]。よって He washed his hands, but his hands remained dirty は完全に容認できる。このように，通常の文脈では結果状態が含意されるように見

えるが，その実現が必須ではない述語を疑似完結述語と呼ぶこととする。疑似完結性はあきらかに会話の含意から生まれるものであるため，Tsujimura の仮説が正しければ，Tsujimura で挙げられている例文は疑似完結述語と同様の容認性を見せるはずである。

一方，Tsujimura の主張通り日本語の述語における完結性が語彙的に規定されておらず，会話的に含意されているならば，それは典型的な到達述語にも当てはまるのだろうかという疑問が生じる。例えば以下のような例である。

(7) ウェイトレスがグラスに（*３分間）水を満たした。

(7)で，グラスが水で満たされている状態は言語的に含意されているが，水を満たすプロセスについては語彙化されていないことが，継続の時間副詞「～間(for)」との不一致からわかる（cf. Vendler 1957, Dowty 1979 など）。よってこれは典型的な到達述語であると思われるが，その完結事象のキャンセル可能性がいかなるものであるか，明らかではない。Tsujimura (2003) は，このような到達述語には言及していないが，日本語における「完結性」の言語的位置づけを考える上でこのような例を無視する訳にはいかないだろう。

A＆N は，上記「疑似完結述語」と「典型的到達述語」を対照条件として，Tsujimura 例文が容認性判断においてどこに位置づけられるかを質問紙調査によって検証した。その結果は，Tsujimura 例文の事象キャンセル容認性は典型的到達述語のそれよりも高いが，疑似完結述語ほどは高くはないという結果となった（図１）。

では，事象キャンセル可能性について上記のような容認性の違いが出たのはなぜだろう。これについてA＆N は以下のような仮説を提唱している。事象キャンセルの現象は，文の前半の肯定命題が後半の否定命題と矛盾すると容認されない。つまり，文の前半部分でＰという命題が真であると表明され，後半でＰが否定されると矛盾するため容認されない。しかし，後半で否定される命題が前半で肯定されたことの一部にすぎないのであれば必ずしも矛盾しない。例えば，前半でＰ＆Ｑが正しいことが表明されても，後半でＱのみが否定されるならば，Ｐは否定されていないので完全には矛盾しない[2)]。その観点から典型的到達述語を考えると，意味論の中にプロセス成分を含んでいないため，到達事象がキャンセルされると何も残らない。よって，到達述語に関しては，表明されることとそれを否定することは同時に起こることができない。しかしTsujimura が挙げた述語はプロセス成分を含んでいるようである。

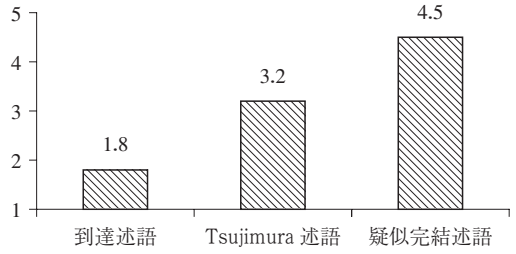

図１　A＆N（forthcoming）で報告された到達述語，Tsujimura 述語，疑似完結述語の容認性評価の平均値（５段階尺度で，５が自然，１が不自然）

(8) 八百屋さんがスイカを３分冷やした。

(8)においては，期間副詞「３分」が共起可能であるので，冷やす活動は冷やされた結果状態同様に語彙的に含まれているようである。よって，結果状態が否定されたとしてもプロセス成分は否定されずに真として残るため，完結性事象は日本語ではキャンセル可能であると考えられる。

なお，同様の指摘は，宮島（1985: 352）においても見られ，動作の持続性を強調する副詞句を付加する場合（「一生けんめい，柿の実を落としたけれど，落ちなかった」）と，結果の未達成を強調する副詞句を付加する場合（「柿の実を落としたけれど，どうしても落ちなかった」）では，前者の方が容認度が高くなるという調査結果が報告されている。

まとめると，A＆N の主張は以下の二点に集約される。

(i) 日本語において事象キャンセルが可能であるという事実が完結性の語彙的含意の欠如に起因するという Tsujimura の主張は強すぎる。
(ii) 日本語の完結性事象キャンセルの可能性は，述語が指示する事象のプロセス成分の強さに応じて決まる。

本稿では，A＆N では紙数の制限で紹介できなかったデータを報告し，その主張の妥当性を再検証していくものである。

3．質問紙調査

事象キャンセル性についての質問紙調査の先行研究としては宮島（1985）がある。宮島（1985）は容認性尺度として「○自然なもの」「△やや不自然だがつかわれるもの」「×まったく不自然なもの」の３段階を採用した。この３段階尺度の潜在的問題点の一つは，中間評価「△」がカバーする範囲が不明確なことである。特に，「△」にのみ「自然かどうか」と「使われるかどうか」という二つの基準が混在しているのが問題である。また，３段階評価ということで，数値として定量化して分析することに難しさがあり，宮島自身は，「○＝1」「△＝0.5」「×＝0」として加算しているが，この数値換算が妥当なものかどうかも不明である。本稿では，リッカート尺度では一般的な５段階尺度を採用した（次節参照）。また，宮島（1985）の質問紙調査では主に，動詞をそろえた上での文のバリエーションが材料として作成され，各バリエーション内部での比較に主眼が置かれたのに対し，本研究では述語の意味論のタイプがキャンセル可能性にどのように作用するかに主眼がおかれた。

3.1．方法

実験参加者は日本語のネイティブスピーカー70名で全員が甲南大学の学生または院生だった。質問紙では文の自然さを５段階で判断してもらった。質問紙の冒頭には文を読み「最も不自然に感じる」場合は５段階のうち「１」に，「ごく自然に感じる」場合は「５」に，中間の場合はそのひっかかりの程度に応じて「２」〜「４」に丸を付けてもらうよう指示文を書いた。各文と評価尺度は中央配置され，以下のように示された。

彼は手を洗ったが，手はきれいにならなかった。
不自然　　1　　2　　3　　4　　5　　自然

質問紙は A4 片面印刷のもの４枚組で構成されており，１枚目は本調査に関する指示を示した。冒頭には，この質問紙調査は日本語文の前半部と後半部の流れが自然かどうかを判断してもらう調査だと明記した。これにより，他の要因（文のなかの一部の名詞句や動詞句のもっともらしさなど）で容認性判断が下されてしまうことをある程度回避できると考えられた。また，指示の中には実験文とは別の例文２種類とその回答例を示した。その２文のうち１文は明らかに自然な例（「学生が先生の研究室を訪れたが，先生はいなかった」），もう一方は明らかに不自然な例（「タケシ君は落とした財布を見つけたが，財布は見つからなかった」）を示し，評価「５」と評価「１」の基準とした。また，一つの文にあまり時間をかけず直観に従って答えてもらうよう指示した。２枚目以降は実験文のみで構成されており，実験文は，似た材料文やペアとなる材料文が近づきすぎないよう配慮されたうえで疑似ランダム的に配置された。参加者は全員同じリストを答えた。材料文の間の相対評価を問題にしているため，フィラー文は入れなかった。

3.2．材料文

実験文に用いたのは(i) Tsujimura が挙げている例文を少し改変したもの（７文），(ii)疑似完結述語を用いた文（５文），(iii)典型的到達述語を用いた文（５文），(iv)同じ動詞に対して異なる直接目的語を用いたペアの文（15文），(v)その他（９文）の計41文である。すべての文は後半部に前半部の述語の含意を打ち消す述語が含まれている。また，前半の動詞とそれを打ち消す後半の動詞が並んでいると全体でイディオム的・比喩的な解釈を受ける可能性がある（例えば「あいつは殺しても死なない」のように）が，本研究はあくまで前半部動詞の完結性の調査であるので，このような解釈で容認性が判断されるのを回避する必要があった。よって，すべての材料文について，前半部動詞と後半部動詞が隣接しないようにした。以下では使われた材料文について触れる。

3.2.1．Tsujimura 例文

Tsujimura が挙げていた例文に基づく材料文は以下の７文である。

(9)　a. 八百屋さんがスイカを<u>冷やした</u>が，気温が高くてうまく冷えなかった。
　　b. サラリーマンがスーツケースに書類を<u>入れた</u>が，うまく入らなかった。
　　c. おばさんが洗濯物を<u>乾かした</u>が，天気が悪くて乾かなかった。
　　d. バーテンダーが氷を<u>とかした</u>が，冷房が効きすぎていてとけなかった。
　　e. お父さんが窓を<u>開けた</u>が，さびついていて開かなかった。
　　f. 掃除当番が机を<u>動かした</u>が，どうしても動かなかった。

g. お坊さんが落ち葉を燃やしたが，湿っていて燃えなかった。

もし我々の予測通り，Tsujimura 例文の述語が結果状態を語彙的に含意しているとすれば，結果状態が語彙的に含まれていない疑似完結述語より事象キャンセルの容認性は低くなるだろう。

3.2.2. 疑似完結述語を用いた材料文

疑似完結述語を用いた例文は以下の５文である。

（10）a. 彼は手紙を送ったが，手紙は相手に届かなかった。
b. 彼は遠くにいる人にボールを投げたが，ボールは届かなかった。
c. 彼は現場に急行したが，事故に巻き込まれて現場にたどりつけなかった。
d. ウェイターが缶ビールをジョッキに注いだが，半分しか入らなかった。
e. 彼は手を洗ったが，手はきれいにならなかった。

疑似完結述語が結果状態は語彙的な含意からではなく，会話的な含意から生まれるものだとすれば，事象キャンセルにして高い容認性を見せるはずである。

3.2.3. 典型的到達述語を用いた材料文

典型的到達述語を用いた例文は以下の５文である。

（11）a. 患者は病院食を残したが，少しも残っていなかった。
b. バンドが演奏を終えたが，まだ演奏は終わっていなかった。
c. ウェイトレスがコップに水を満たしたが，半分しか入らなかった。
d. 家政婦が部屋を綺麗にしたが，部屋はちらかったままだった。
e. 彼は現場に来たが，事故に巻き込まれて現場にたどりつけなかった。

到達述語は結果状態が必ず達成されなければならず，語彙的に含意されている。そのため事象キャンセルが起こると容認性は低くなるだろう。

3.2.4. 異なる目的語を用いた材料文

目的語に付く数量詞や定性によって達成述語のアスペクトが変わることは良く知られている（Vendler 1957, Dowty 1979, etc.）が，目的語の内容によってもアスペクト特性が変わることがあると考えられる（Ikegami 1985: 297ff）。目的語の影響を定量的に測るために，以下のような例文を用いた。なお，「闘志を燃やした」は Tsujimura 例文の「落ち葉を燃やした」と比較した。

（12）まとめた
a. リーダーが皆の意見をまとめたが，最終的にまとまらなかった。
b. 田中さんはその商談をまとめたが，結局まとまらなかった。

上記対においては，「意見をまとめた」の方が具体的プロセスが想定しやすいように思えるので，キャンセル容認性が高いと予測した。

（13）燃やした
a. お坊さんが落ち葉を燃やしたが，湿っていて燃えなかった。（Tsujimura 例文）
b. 高校球児が闘志を燃やしたが気持ちが滅入っていて闘志は燃えなかった。

上記対においては，抽象名詞を目的語にとる「闘志を燃やした」よりも，具体的な物質を目的語にとる「落ち葉を燃やした」の方がより活動のプロセスが具体的であり，キャンセル容認性が高いと予測した。

（14）解いた
a. 受験生がその練習問題を解いたが，結局解けなかった。
b. 高校生がその難問を解いたが，結局解けなかった。
c. 彼女は彼氏の誤解を解いたが，結局解けなかった。

練習問題を解くことは複数の問題を反復的に解くという意味として捉えられ，プロセスを想定するのが容易である。一方，「難問を解いた」は解決した瞬間に重点を置いているように思われ，キャンセル容認性はより低くなると予測した。また，「誤解を解いた」との比較では，誤解を解く行為は目には見えない抽象的な

活動であるので，「闘志を燃やした」と同様の理由でキャンセル容認性は低くなるだろうと予測した。

（15）はめた

a. 甥っ子がパズルのピースをはめたが，その場所にははまらなかった。

b. 新婦がダイヤの指輪を指にはめたが，どうにもはまらなかった。

c. ビジネスマンがライバルを罠にはめたが，ライバルははまらなかった。

ここで「ピースをはめた」という活動においては，ピースをはめる場所は平面的であり，時間幅を持たない。一方，「指輪をはめた」という活動で，指輪が立体である指先を通ってから指の付け根に達するまでには時間幅がある。このため「指輪をはめた」の方が「ピースをはめた」よりも活動のプロセスを相対的に明示的に含んでいると考えることができ，容認性が上がると予測できる。また，「ライバルを罠にはめた」においては，「罠」が抽象名詞であり，全体としても抽象的な活動であるので，具体名詞を取る「ピースをはめた」「指輪をはめた」より容認性は低くなるだろうと考えられた。

（16）挟んだ

a. パン職人はパンにチーズを挟んだが，分厚くて挟めなかった。

b. アルバイトの学生は一旦休憩を挟んだが，客が来たため挟めなかった。

上記対においても，具体名詞と抽象名詞の違いが見られると予測した。そのため「休憩を挟んだ」は，キャンセルの容認性は低くなると考えられた。

いずれの動詞においても，目的語が抽象名詞を取る場合（「誤解を解く」「闘志を燃やす」など）は活動のプロセスが想定し辛いため，事象キャンセルの容認性は具体名詞を取る場合よりも低くなると予測された。

（17）焼いた

a. コックが肉を焼いたが，オーブンが壊れて結局できなかった。

b. パティシエがケーキを焼いたが，オーブンが壊れてできなかった。

上記対においては，目的語そのものにゴールの意味が含まれているかどうかという点で違いが見られる。ケーキというのは，焼き始めは材料にすぎず，生地を焼くことで初めてケーキという完成形になるが，肉は焼く活動の開始前も終了後も肉のままである（Pustejovsky 1995 など）。つまり，ゴール達成が目的語そのものに含意された創造述語である「ケーキを焼いた」の方がよりキャンセル容認性が低くなるだろうと考えられる。

（18）出した

a. おかあさんが洗濯物を外に出したが，扉が開かなかったので出せなかった。

b. おばあちゃんが猫を外に出したが，いやがって出なかった。

上記対においては，無生物の目的語「洗濯物」と生物の目的語「猫」を用いて対照している。生物が目的語の場合，動作主の活動に対するコントロール能力を持つため，動作主の活動プロセスがより複雑化する余地ができ，キャンセル容認性が上がると考えられる。

3.2.5. 話者視点に関する材料文

本調査では，「話者視点」が事象キャンセル可能性に与える影響を検証するための材料文も含めた。多くの言語では動作主移動の動詞に話者視点による対比が見られる（e.g., come vs. go）が，よく知られるように日本語では授受動詞にも話者視点による対比が存在する。このように，動作主または主題の移動を含む動詞のゴールに話者の視点がある場合，話者の心理として，ゴールへの到達がキャンセルしにくいのではないかというのが本稿の主張である。それを検証する例文は以下の通りである。

（19）方向づけられた移動動詞

a. 彼は現場に急行したが，事故に巻き込まれて現場にたどりつけなかった。（疑似完結）

b. 彼は現場に行ったが，事故に巻き込まれて現場にたどりつけなかった。

c. 彼は現場に来たが，事故に巻き込まれて現場にたどりつけなかった。（到達述語）

「急行した」は疑似完結述語の例文として，「来た」は典型的到達述語の例文としてすでに言及したが，方向づけられた移動動詞として，「行った」とも比較対象とした。「行った」と違い，「来た」はゴールが話者視

点で捉えられるため，キャンセルの容認性は低くなると予測された。

(20) 授受を表す動詞
　a. 孫が祖父に手紙をあげたが，祖父は受け取らなかった。
　b. 孫が手紙をくれたが，私はかたくなに受け取らなかった。
　c. 祖父は孫から手紙をもらったが，受け取りを拒否した。
　d. 彼は手紙を送ったが，手紙は相手に届かなかった。(疑似完結)

「あげた/くれた/もらった」群は，「手紙」を目的語に取ることができる動詞として疑似完結述語の例文「手紙を送った」と比較した。授受を表す動詞においては，「もらった」が受け取り動詞（＝ゴール指向），「くれた」は受け渡し動詞であるが受け取り手（＝ゴール）に話者視点がある。こういった，受け取り手に重点をおく表現においては，受け取りの含意が強く，「行った/来た」の対照と同様に，事象キャンセルの容認性が低くなると予測した。

3.2.6. その他の材料文

これまでの分類にあてはまらない文は以下のとおりである。

(21) 修理した/直した
　a. 電器屋がパソコンを修理したが，結局直らなかった。
　b. メカニックがバイクを直したが，結局直らなかった。

「修理した/直した」の比較では，プロセス指向が相対的に高いように思える「修理した」のキャンセル容認性が高くなるだろうと考えられた。

対のない以下のような例文も調査の対象とした。

(22) 彼は髪の毛を脱色したが，まったく色は落ちなかった。
(23) 彼はその男を殺したが，まだ息絶えていなかった。
(24) 牧師がろうそくに火をともしたが，ちっとも火がつかなかった。

「脱色した」「殺した」「ともした」は明らかに完結性が語彙的に含意されているが，そのプロセス成分の強さについては判断がしがたい。よって，今回の調査の対照文と比較してどのような位置づけにあるかを明確にするために材料文に含めた。

3.3. 結果と考察

前節で導入した41の材料文すべての質問紙調査の結果は，その平均値とヒストグラムによって付録に示した。

A＆N ですでに報告されているとおり，また，すでに前述したとおり，Tsujimura 例文の平均値3.2は，疑似完結述語の平均値4.8と典型的到達述語の平均値1.8の間に位置し，日本語における完結性が会話的含意にすぎないという Tsujimura（2003）の主張は支持されるとは言いがたいことが分かった。ただ，Tsujimura 例文の個々の評価を見ると，表１で示されているように幅がある。その理由は，やはり個々の動詞によって語彙的あるいは語用論的に想定されるプロセス成分の強さが異なるからであるように思える。例えば，スイカを冷やしたり，落ち葉を燃やしたりするのには一定の時間幅を持ったプロセスが想定できるが，窓を開けたり，机を動かしたりするのには，時間幅を持ったプロセスを想定しにくい。あるいは別の観点から見ると，完結性の尺度に段階性があるか，二極的であるかという違い（Pustejovsky 1991, Hay, Kennedy and Levin 1999 など）がプロセス成分の強さに関わっているとも考えられる。これらの要因により容認度の差が出たと考えられる。

Tsujimura 例文	容認性
スイカを冷やした	3.8
書類を入れた	3.8
落ち葉を燃やした	3.5
洗濯物を乾かした	3.2
氷を溶かした	3.0
窓を開けた	2.5
机を動かした	2.4

表１　Tsujimura 例文の評価の平均値

同じ動詞が異なる目的語を取る例文での容認性判断に関して，「意見/商談をまとめた」（図19，20），「落ち葉/闘志を燃やした」（図21，22），「練習問題/難問/誤解を解いた」（図23-25），「チーズ/休憩を挟んだ」（図31，32）ではそれぞれ具体的目的語と抽象的目的語を取った場合に有意な差が見られた（χ^2 検定の結

果は，「まとめた」χ^2＝22.8，df＝4，p＜.001，「燃やした」χ^2＝36.7，df＝4，p＜.001，「解いた」χ^2＝44.8，df＝8，p＜.001，「挟んだ」χ^2＝14.2，df＝4，p＜.001)[3]。しかし，全てのペアが強い対照を見せたとは言えない。「ピースを/指輪を/ライバルをはめた」は，χ^2 検定では有意差が出たものの（χ^2＝16.6，df＝8，p＜.05），具体名詞を取る「ピースをはめた」（平均値3.6）が高い容認度を示した一方で，同じく具体名詞を取る「指輪をはめた」（平均値2.9）と抽象的な「ライバルをはめた」（平均値2.7）では，予測に反し，違いが出なかった（χ^2＝2.9，df＝4，p＞.5）。この理由は明らかではなく，さらなる検証が必要である。

「肉/ケーキを焼いた」（図29，30）においては，創造を表す「ケーキを焼いた」の方が「肉を焼いた」よりも完結性が強く，事象キャンセルの容認性が低くなると予想したが，統計的有意差は見られなかった（χ^2＝6.8，df＝4，p＞.1）。同様の結果は宮島（1985）でも報告されており，「水を沸かした」と「湯を沸かした」では後者が創造を表す（Ikegami 1985）が，質問紙調査では違いが出なかった。事象キャンセル可能性には，プロセス成分の強弱ほどは完結性の強弱は影響力がないのかもしれない。

「洗濯物/猫を外に出した」（図33，34）においては，予測通り有生の目的語である後者の方が無生の前者より有意にキャンセルの容認性が高かった（χ^2＝27.1，df＝4，p＜.001）。これも，完結性よりプロセス成分の想定が影響力が強いことの反映と解釈できる。

話者視点についての材料文に目を移すと，「急行した/行った/来た」（図35-37）のような方向付けられた移動を表す動詞では「来た」の容認性が評価「１」に集中して平均値1.6となっており，「行った」（平均値3.1），「急行した」（平均値4.6）と比べ低くなっている。これは「来た」が，話者が着点から見た行動であり，到着が強く含意されているためと考えられる。χ^2 検定においても「来た」と「行った」の差は有意であった（χ^2＝49.2，df＝4，p＜.001）。

「くれた/もらった/あげた」（図39-41，χ^2＝49.6，df＝8，p＜.001）のような授受の意味を持つ動詞群については，「もらった/くれた」のように受け取り手視点の動詞が，「来た」と同様に強いゴール指向があり，受け取りがキャンセルされると容認度は低くなるだろうと予測されたが，実際は「くれた」の容認性は高く（平均値4.4），「あげた」（平均値4.4）と違いがなかった（χ^2＝1.6，df＝4，p＞.5）。「もらった」（平均値3.2）が「くれた」より評価が低かった理由は，「もらった」が純粋な受け取り動詞であるのに対し，「くれた」は受け取りに話者の視点があるものの，受け取りではなく受け渡しの動詞であるという点で「あげた」と同等であるからと考えられる。しかし，「行った」と「来た」の容認度に影響を与えた話者視点が，「あげた」と「くれた」の容認度に影響を与えなかった理由は不明である。

「修理した/直した」（図42，43）では「修理した」がより事象キャンセル容認性が高い結果となっている。これは「修理した」の方が語彙的によりプロセス指向であるためだろう（χ^2＝28.7，df＝4，p＜.001）。

その他の例文として含まれていた「脱色した」（図44）は一見，「綺麗にした」等と同様，結果指向の強い到達述語のようだったが，実際の結果は評価「４」「５」に集中し平均値4.2となり，事象キャンセルが可能なものと判断された。これは，「脱色した」が「綺麗にした」とは異なり，具体的な活動のプロセス性を含んでいるためと考えられる。つまり，脱色を行うためには一般的に脱色剤を付けて長時間のプロセスを経なければならないことが想定される。また，「脱色した」同様に分類が難しく感じられた「殺した」（図45，平均値2.5），「ともした」（図46，平均値2.9）に関しては，尺度中央値３より低いという点で到達述語よりの振る舞いを見せている。「殺した」については宮島（1985）でも同様の報告があるが，「殺しても死なない」のような慣用句が定着していることが「殺した」単体の完結性キャンセル可能性にさほど影響を与えていないのは興味深い（あるいは影響を与えた結果2.5評価まで「引き上げられた」のだろうか？）。また「ともした」は評価がほぼ均等に拡散しており，それが何を意味するのか解釈が難しい。今後の研究が待たれる。

４．結　　論

述語の表す完結事象がキャンセル可能かどうかは，完結性が語彙的に含意されているかどうかだけでは説明できず，活動プロセスの具体的な想定がどの程度可能かを考慮しなければならないという我々の主張は，概ね支持された。本稿では，疑似完結述語，典型的到達述語と Tsujimura 述語の対比だけではなく，A＆N では報告されなかった様々な対比をヒストグラムと統計的検定によって詳細に報告した。例えば，動詞を揃えた比較では，具体名詞が目的語である場合の方が抽象名詞の場合よりキャンセル可能性が高まることは A＆N でも報告されているが，生物と無生物でも同様

の対比が見られることが本稿において報告された。これは，目的語が生物である方が動作主の活動プロセスが複雑化するからと我々は考える。一方，「ケーキを焼く」（創造）と「肉を焼く」（非創造）のように，目的語に内在する完結性（Pustejovsky 1995 の言うように，ケーキは「創造」を内在している）の影響は確認できなかった。これも，事象キャンセル可能性において，完結性の強さよりもプロセスの強さの要因が優位に働くことの表れと解釈することが可能かもしれない。

また A＆N にはない主張として，本稿では「話者視点」の影響を主張し，「話者視点」を含む動詞の代表として，方向付けられた移動動詞や授受動詞における事象キャンセルがどの程度容認されるかを検証した。「行った/来た」のペアにおいては，話者視点がキャンセル可能性に明確に負の影響を与えることが示された。また，「もらった」が「あげた/くれた」より容認度が低いのも似た理由ではないかと考えられる。しかし，話者視点という点で平行性が見られる「行った/来た（動作主の移動プロセス）」の対と「あげた/くれた（主題の移動プロセス）」の対の比較では，我々の主張では説明のつかない容認性のパターンが見られた。つまり，動作主移動が話者領域ゴールに至る「来た」と，主題移動が話者領域ゴールに至る「くれた」では，前者にのみ話者視点の負の影響が見られ，後者はまったくそれが見られなかった。この発見は，本稿の主張では説明することができない。これに関して今後さらなる調査と検証が必要であろう。

注

1）Bouillon and Bussa（2001）の理論的枠組みである生成レキシコン理論（Pustejovsky 1995）においては，本稿で言う fake telic は単に TELIC と呼ばれる。生成レキシコン理論における TELIC は，アスペクト研究で広く使われる意味の telic より限定的な意味で用いられ，内包的文脈におけるゴールを指す。本稿の fake telic とはそういったゴールを指す。

2）論理学的には，P＆Q＝1（⇔ P＝1＆Q＝1）と Q＝0 は一続きの命題として矛盾するが，語用論的感覚としては，Q＝0 だとしても前半部の命題の少なくとも半分（P＝1）は維持できるので，完全に矛盾しているとは言えないと「感じられ」，それが日本語において事象キャンセルが可能である理由だと我々は考える。

3）なお，本節では χ^2 検定の結果を報告しているが，我々はすべての比較検定について分散分析も行った。分散分析によって得られた p 値は，χ^2 検定によって得られたそれとほぼ同じであった。

参考文献

Aoki, Natsuno and Kentaro Nakatani. Forthcoming. “Process, Telicity, and Event Cancellation in Japanese: A Questionnaire Study.” To appear in *JELS* 30. [The original paper was read at the ELSJ 5th International Spring Forum in 2012.]

Bouillon, Pierrette and Federica Bussa. 2001. “Qualia and the Structuring of Verb Meaning.” In P. Bouillon and F. Bussa (eds.) *The Language of Word Meaning,* 91-123. Cambridge: Cambridge University Press.

Dowty, David. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar.* Dordrecht: Reidel.

Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin. 1999. “Scalar Structure Underlies Telicity in ‘Degree Achievements’.” *SALT* 9: 127-144.

Ikegami, Yoshihiko. 1985. “‘Activity’ – ‘accomplishment’ – ‘achievement’: A Language that Can’t Say ‘I burned it, but it didn’t burn’ and one that can.” In A. Makkai & A. K. Melby (eds.) *Linguistics and Philosophy: Essays in Honor of Rulon S. Wells,* 265-304. Amsterdam: John Benjamins.

影山太郎. 1996.『動詞意味論』くろしお出版.

宮島達夫. 1985.「ドアをあけたが，あかなかった —動詞の意味における＜結果性＞—」『計量国語学』14: 335-353.

Pustejovsky, James. 1991. “The Syntax of Event Structure.” *Cognition* 41: 47-81.

Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. MIT Press: Cambridge, MA.

Tsujimura, Natsuko. 2003. “Event Cancellation and Telicity.” In *Japanese/Korean Linguistics* 12: 388-399

Vendler, Zeno. 1957. “Verb and Times” *The philosophical Review,* Vol. 66, No. 2: 143-160.

付　　録

3節で示した41の材料文すべての質問紙調査の結果（n＝70）を，その平均値とヒストグラムによって示す。ヒストグラムのX軸は容認性判断「1」〜「5」を，y軸はそれぞれの容認判断の数値を選んだ参加者の人数を示している。

A1　疑似完結述語を用いた材料文

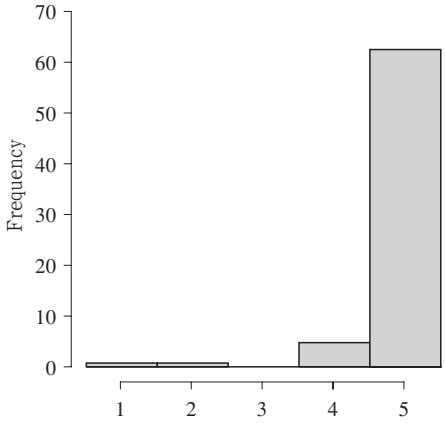

図2　「送った」Mean＝4.8

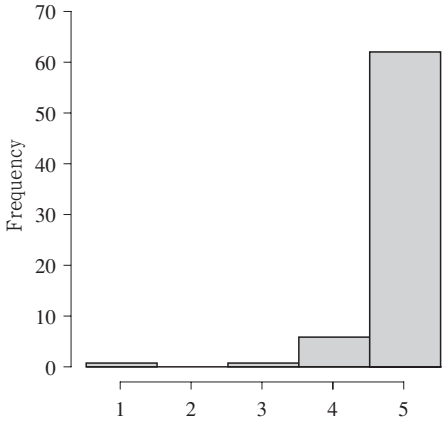

図3　「投げた」Mean＝4.8

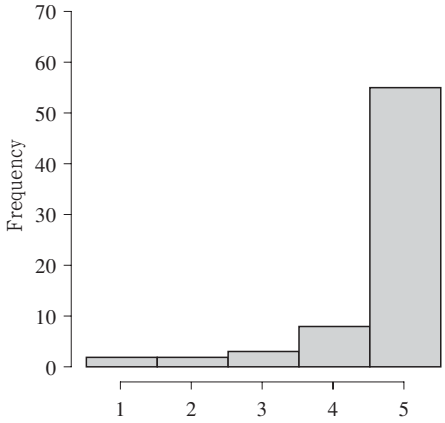

図4　「現場に急行した」 Mean＝4.6

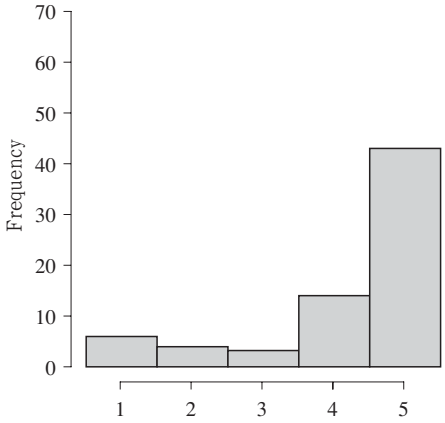

図5　「注いだ」 Mean＝4.2

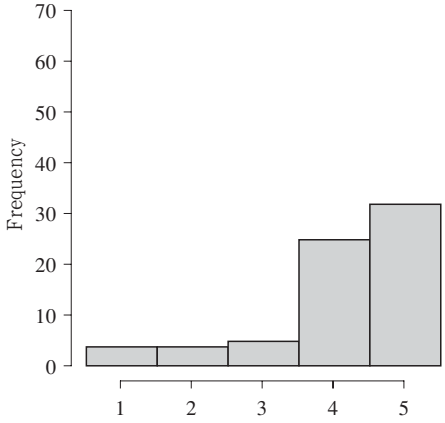

図6　「洗った」 Mean＝4.1

A2　Tsujimura 材料文

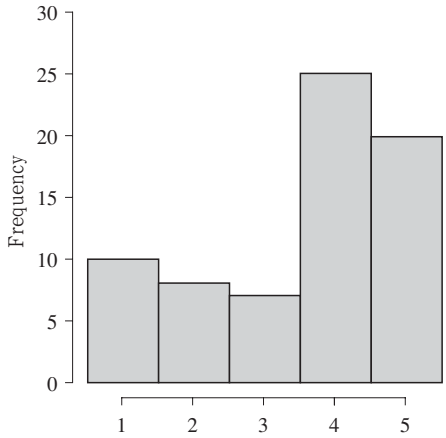

図７　「落ち葉を燃やした」Mean＝3.5

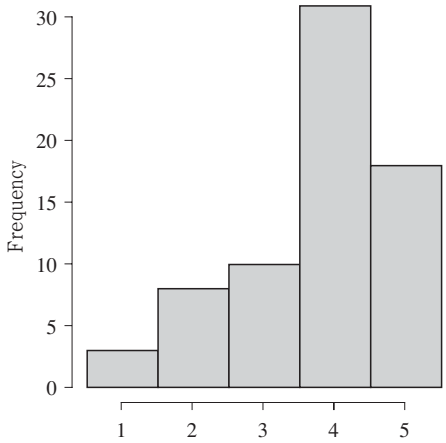

図８　「書類を入れた」Mean＝3.8

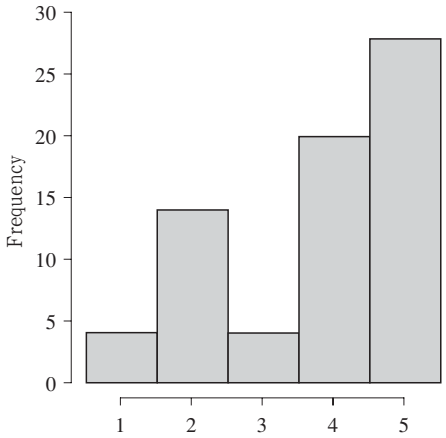

図９　「スイカを冷やした」Mean＝3.8

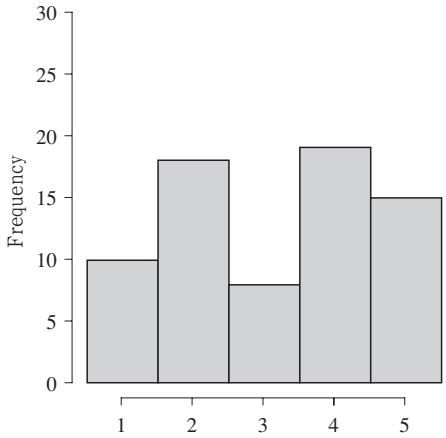

図10　「洗濯物を乾かした」Mean＝3.2

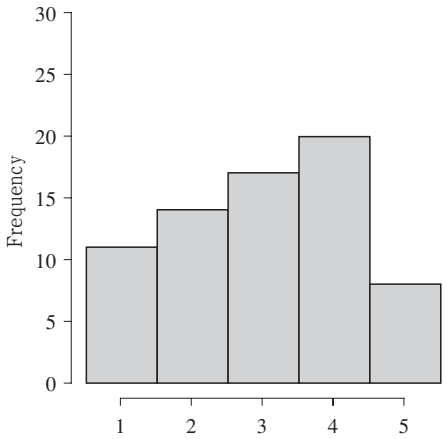

図11　「氷を溶かした」Mean＝3.0

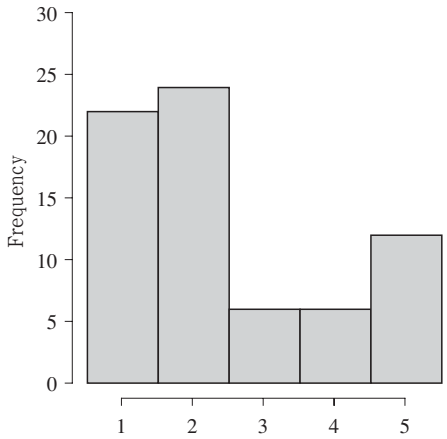

図12　「窓を開けた」Mean＝2.5

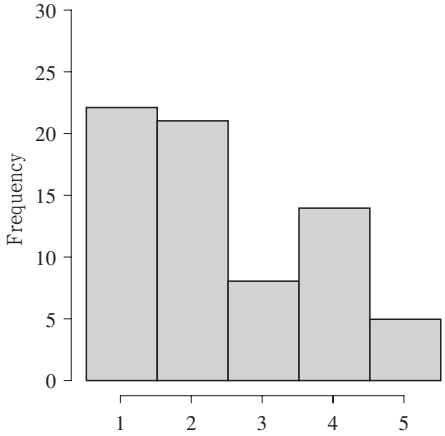

図13　「机を動かした」Mean＝2.4

A3　典型的到達述語を用いた材料文

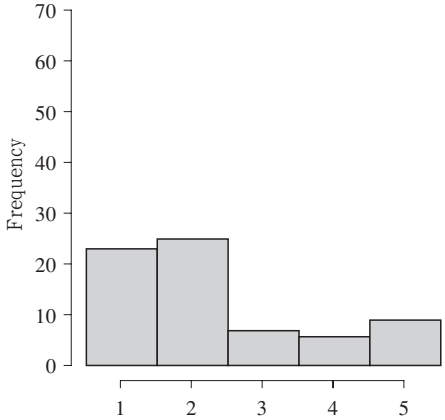

図14　「綺麗にした」Mean＝2.3

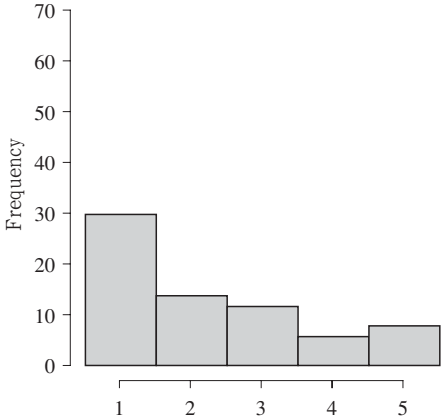

図15　「終えた」Mean＝2.3

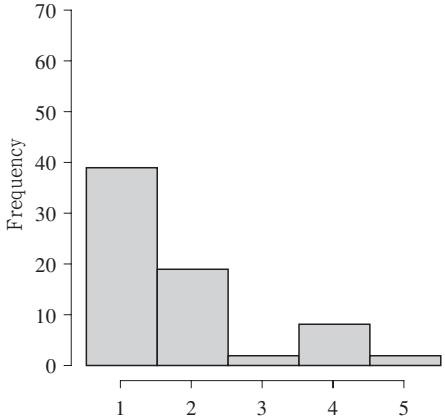

図16　「満たした」Mean＝1.8

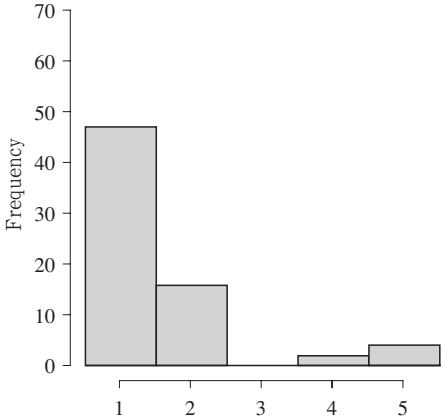

図17　「来た」Mean＝1.6

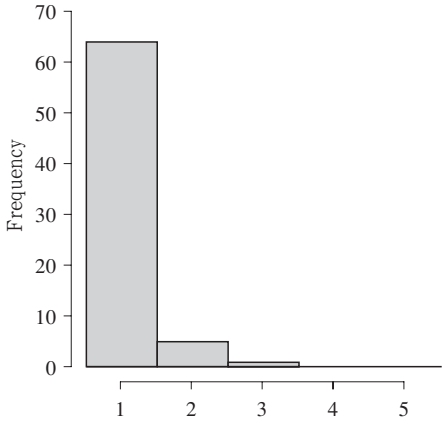

図18 「病院食を残した」Mean＝1.1

A4　異なる目的語を用いた材料文

まとめた

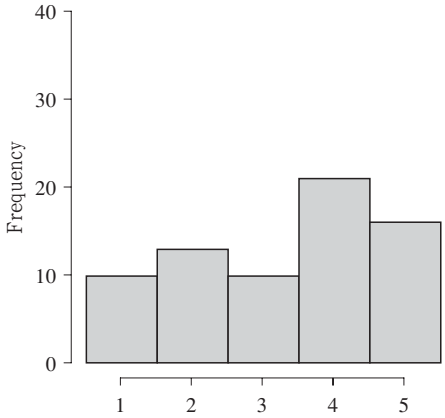

図19 「意見をまとめた」Mean＝3.3

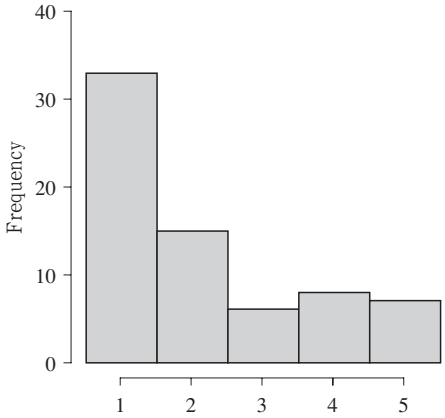

図20 「商談をまとめた」Mean＝2.1

燃やした

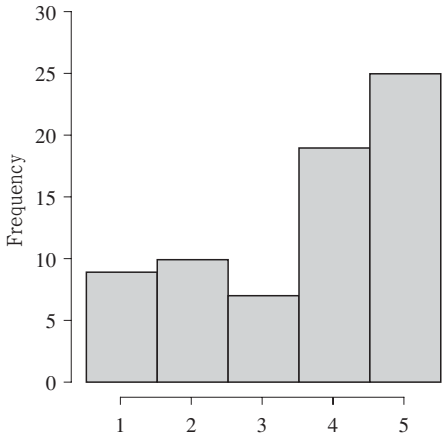

図21 「落ち葉を燃やした」Mean＝3.5（＝図７）

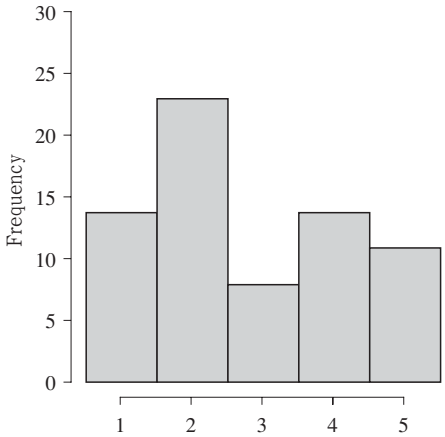

図22 「闘志を燃やした」Mean＝2.1

解いた

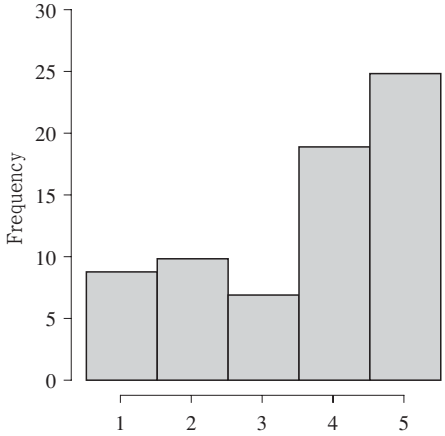

図23　「練習問題を解いた」Mean＝3.6

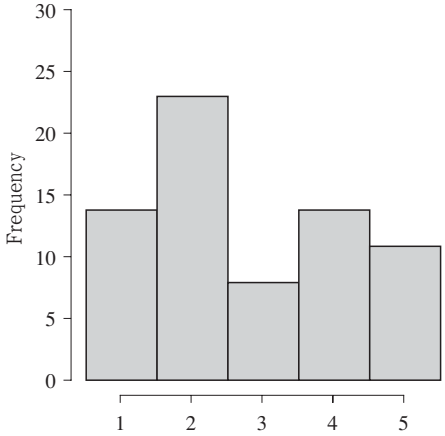

図24　「難問を解いた」Mean＝2.8

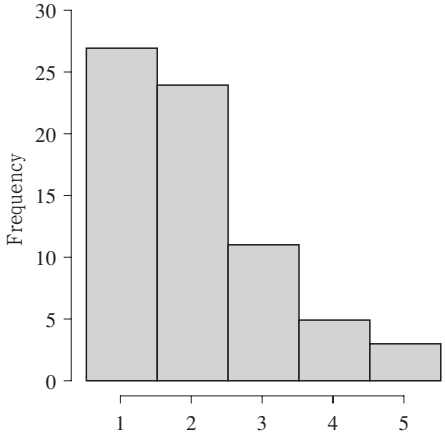

図25　「誤解を解いた」Mean＝2.0

はめた

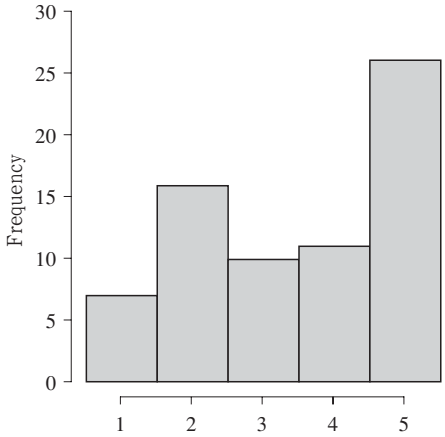

図26　「ピースをはめた」Mean＝3.6

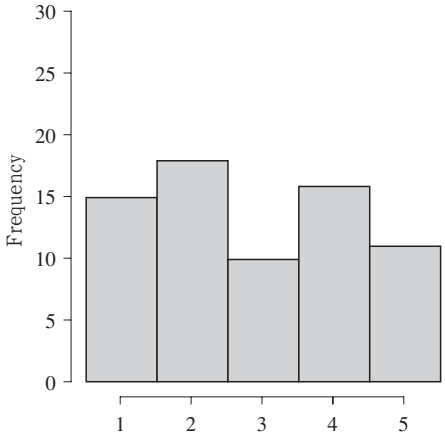

図27　「指輪をはめた」Mean＝2.9

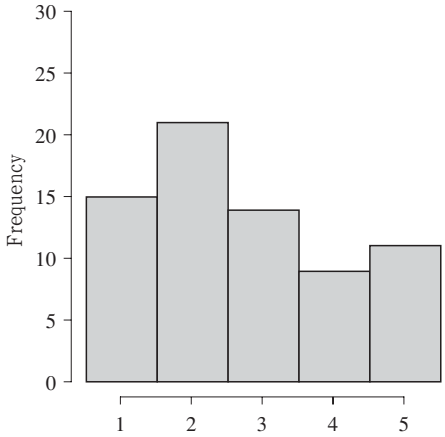

図28 「ライバルを（罠に）はめた」Mean＝2.7

焼いた

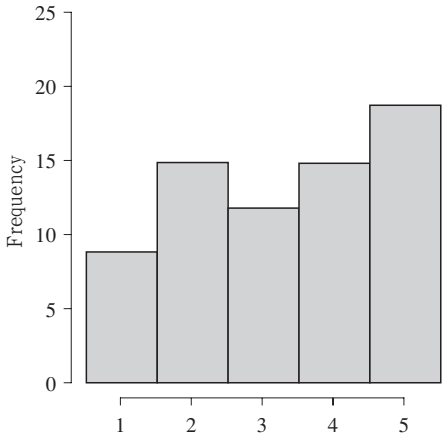

図29 「肉を焼いた」Mean＝3.3

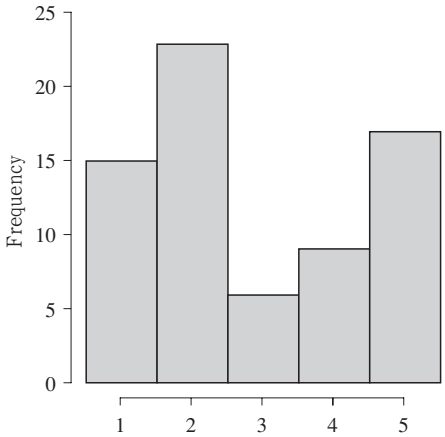

図30 「ケーキを焼いた」Mean＝2.9

挟んだ

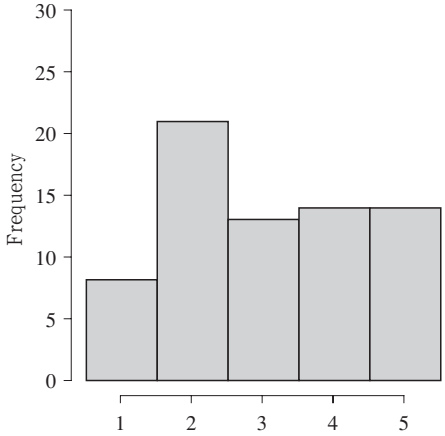

図31 「チーズを挟んだ」Mean=3.1

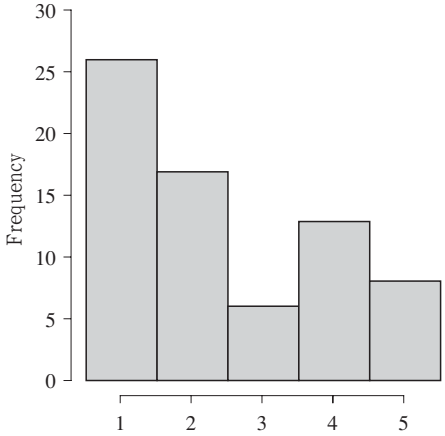

図32 「休憩を挟んだ」Mean＝2.4

出す

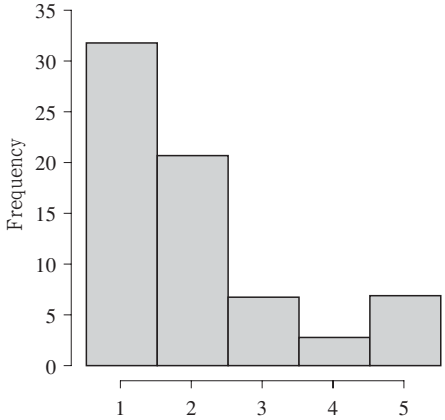

図33　「洗濯物を外に出した」Mean＝2.0

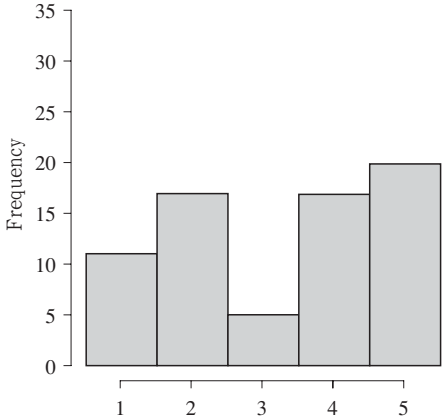

図34　「猫を外に出した」Mean＝3.3

A5　話者視点に関する材料文

行った/来た/急行した

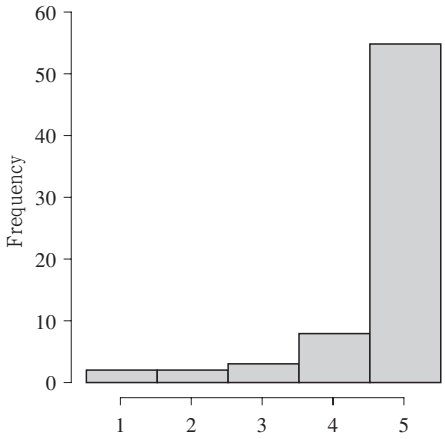

図35　「急行した」Mean＝4.6（＝図４）

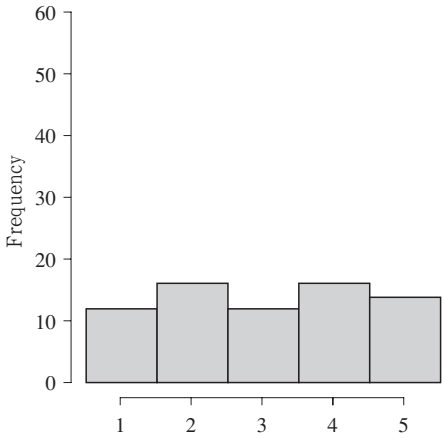

図36　「行った」Mean＝3.1

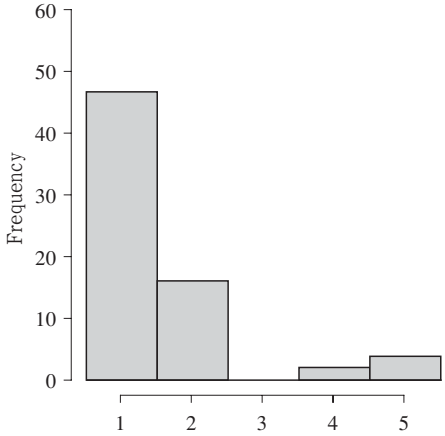

図37　「来た」Mean＝1.6（＝図17）

送った/あげた/くれた/もらった

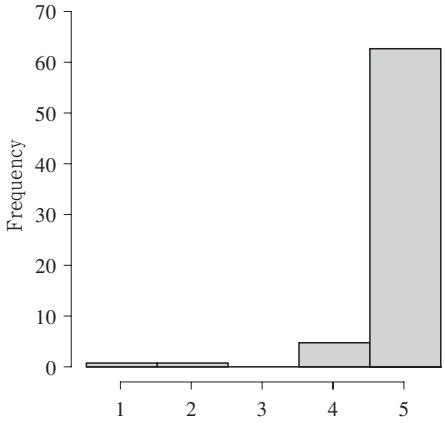

図38　「手紙を送った」Mean＝4.8（図２）

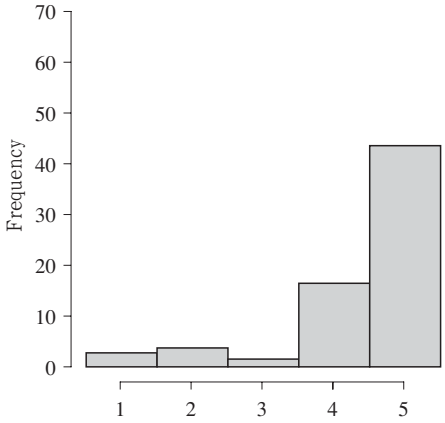

図39　「手紙をくれた」Mean＝4.4

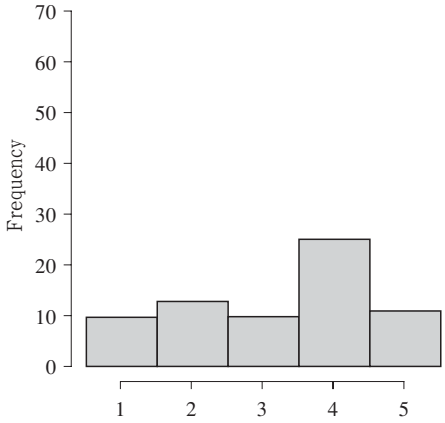

図40　「手紙をもらった」Mean＝3.2

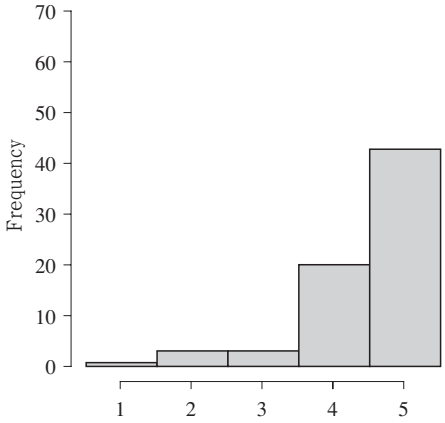

図41　「手紙をあげた」Mean＝4.4

A6　その他の材料文

修理した/直した

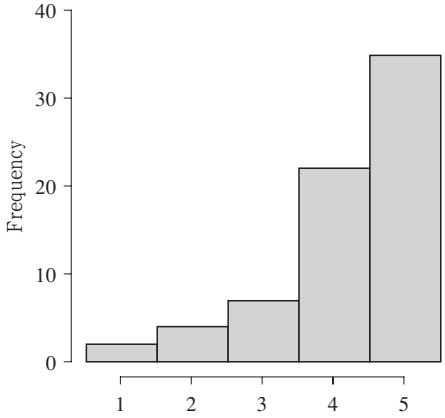

図42　「修理した」Mean＝4.2

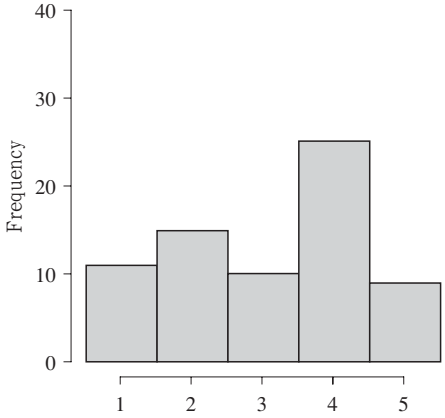

図43　「直した」Mean＝3.1

その他

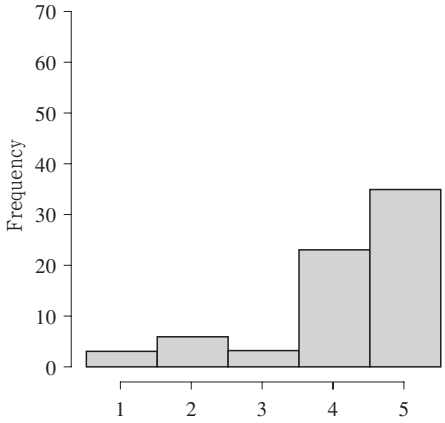

図44　「脱色した」Mean＝4.2

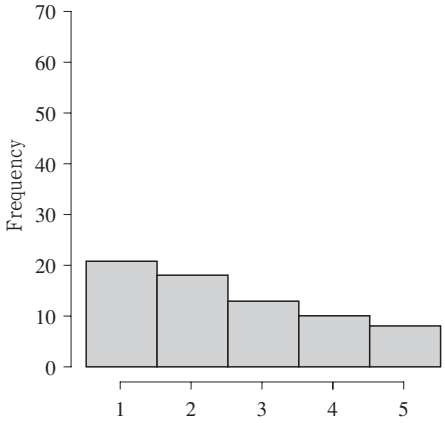

図45　「殺した」Mean＝2.5

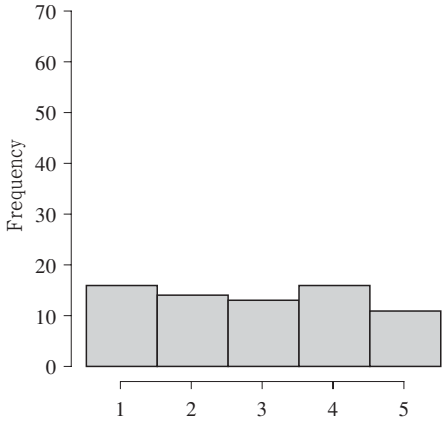

図46　「火をともした」Mean＝2.9